

# 10/27,28

## 福井県若狭高校 渡邊久暢先生 授業見学記

森 大徳

従姉妹がお世話になった縁で知り合った渡邊久暢先生の授業を2日間にわたり見学。年度始めのプリントに、「自立した話し手・聞き手(聴き手・訊き手)・書き手・読み手になろう」とあり、渡邊先生の授業のすべては、この自立した学び手を育てるという姿勢に貫かれていました。自分の授業と比較することで自分の至らない点が浮き彫りになるだけでなく、「自分なりのやり方でこの考え方を貫きたい」と思わせる授業でした。巷にあふれる最近流行りの「アクティブラーニング」という言葉に躍らされない、「静かなアクティブラーニング」が実現されていました。「アクティブ」とはどういうことなのか、じっくり考えたい方は、渡邊先生の授業を、2日間はお覧になると良いと思います。以下、気づいたことや感想などを整理してみました！

0. チャイムとともに始まる授業 ・起立、礼はない。後に触れるノートによる席替えにより、自然と授業が始まる。学びを始めるのはあくまでも生徒。

1. 静かなアクティブラーニング ・とにかく「静か」。一人ひとりが思考を深める時間がとても大切にされている。授業や先生の立ち居振る舞いすべてが、一人ひとりの思考の深まりを保証するために構成されている。・渡邊先生は必要最少限度のこと以外はしゃべらない。黒板が先生のつぶやきを伝達手段になっている。これが、必要な情報を伝えるとともに、教室全体に安心感をもたらしている。(自分の授業は、自分と生徒も、先生の授業に比べるとうるさい。本当に思考する時間を保障できているかはとてもあやしい。沈黙を壊してしまうこともよくある。)

2. すべては一人ひとりの思考のために ・周囲で考えをシェアしたり、仲間と話し合ったりするのは、あくまでも一人ひとりの思考の手段。最後は一人ひとりが考える時間が、潤沢に確保されている。・タイマーで時間が区切られる。シ

ェアをする直前には1分のインターバル。これにより安心して自分たちの思考をシェアできる。・シェアしたり十分に思考したりすると、解釈や解答は、ある一定の水準まで高まっていくこと。もちろん、後に触れるノートを見てフォローも可能。もしかしたら、僕たち教員は、時間をかけて十分に思考すれば生徒自身が辿り着けることを、あれやこれや教え込むことで、かえってたどり着けなくさせているのかもしれない。（自分は、話し合いをさせて、結果を提出してもらい、それをもとに次の授業を組み立てるということをよくやるが、一人ひとりの思考は置き去りにされているかも。）

3. ノートのあまりにも大きな役割 ・毎朝提出されるノートが不可欠。ノートは写すためのものではなく、思考を深め記録し、自身をメタ的に振り返るものとして機能。つまりは、みどりの手段として、さらにはポートフォリオとして極めて大きな役割をはたしている。そのため、〈見取り→目標設定→計画→実行→評価〉の一連の流れと基準とが明確。学びの質についてもノートを見て、その必要があれば手立てを考えればよい。・ノートなので、プリントまでいかななくても、紙の切れ端で情報の小出しが可能。生徒はそれをノートに貼る。文章を読んだり課題に取り組んだりのスピードは生徒により異なるので、それが終わった生徒から追加の紙をもらっていく。主体的に取り組ませつつ、生徒一人ひとりのペースを保証している。・毎授業のはじめにノートをランダムに机に置いていく。これにより毎回席がかわり、異なる相手と交流することとなる。もちろん、ケアが必要な生徒の座席位置や、授業中に記述を取り上げて紹介したい生徒の位置を自然と指定することも可能。・授業を見ながら、学びの質の保証はどうしているんだろう、とか、評価はどうしているんだろう、とか、よくある疑問をいただくたびに、結局全ての疑問の答えはこのノートに行き着く。とにかく一冊のノートの果たしている役割が半端なく大きい。・そこまで手放すのは怖いという教員も多いと思うが、渡邊先生には生徒の状況が手に取るように分かる仕組みになっており、生徒は渡邊先生の作った箱庭のなかで存分に思考を深められる。「エサをまいて、どうなるかを端っこで見ているイメージ」という言葉が印象的。この授業やノートを見ると、生徒の現状を把握できていないまま、生徒が思考を深められないまま進行していくことのほうが怖くなってくる。最小限の解説しかないという先生の覚悟は、ノートによって得られた自信に支えられている。

4. 板書の秘密・渡邊先生の授業をみた多くの教員が、黒板の字や言葉遣いの崩れっぷりに驚くと思われる(眉をひそめる教員もいるかも)。しかし、この板書こそが、「質より量」という合言葉とともに、生徒の「書く」ことへのハードルを下げている。先生は徹頭徹尾生徒のパフォーマンスを最大にするために存在している。「負けるが勝ち」という先生の言葉が印象的。(自分の授業は、基本的に質を求めてきた。そして、最終的には自分がそれを見せようとしている。そのために思考を諦めてしまう生徒もいるはず。能力や発達段階はそれぞれ異なるのだから、そこは一人一人に任せてしまえばよい。)

5. 目標を欲張らない、生徒が出発点・渡邊先生は無理やり生徒を計画どおりに連れていこうとしない。生徒の様子を見て、諦めるところはスパッと諦める。取るべきところは取る。その瞬時の判断が鮮やかで的確。・見ていないようで生徒一人ひとりを見ている。これもノートがあるおかげだろう。マークすべき生徒はわかっているので、効率的に状況を判断できる。

6. 学びの終着点を決めるのは生徒・授業の終わり方が素晴らしい。気づくと先生がいなくなる。生徒は黙々とノートで思考を深めている。その時間を壊さずに、先生はいなくなる。学びの終着点を決めるのはあくまでも生徒。その姿勢が貫かれている。チャイムが鳴っても教室は静かで、書いている生徒、周りと授業についてこじんまりと振り返っている生徒がいたのが印象的。自分で学んだという実感、学ぶ力、学ぶ構えが獲得されているのを感じる。読みの結果ではなく、考え学ぶ態度と能力を求めるという姿勢が貫かれている。(自分の授業、というか一般的な授業は、制度としての時間によって思考が中断されてしまう。決定権がチャイムなり教員なりにある。)

7. 無理をせず持続可能な授業、本当の learning journey・持続可能なところが渡邊先生の実践の肝。ノートチェックは、生徒が考えを深めるあいだに、別のクラスのぶんをすませる。コメントも「なるほど」「いいですね」など最小限。無理をしない。・生徒も、授業とノートによって、毎日思考を持続させている。まさに長い長い learning journey を生徒は続けている。